

私が生まれた日

ヨブ記 2 章 11-3 章 26 節

はじめに

今年から、毎月第四主日の説教は、旧約聖書からの説教となっています。私が旧約聖書から説教する時は、「ヨブ記」から説教することにしています。

1. ヨブの試練

(1) 神様に祝福されたヨブ

ヨブという人は、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている人でした。

神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産を与えられました。ヨブには、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべがいました。

また彼には、七人の息子と三人の娘がいて、彼らはとても仲が良く、お互いの家に集まって宴会を開き、よく一緒に食べたり飲んだりしていました。

ヨブは、そんな子どもたちを愛していて、彼ら一人ひとりのために全焼のささげ物を献げていました。彼らが心の中で神様を呪って罪を犯したかもしれないと思ったからです。

彼には、多くの財産と仲の良い子どもたちがいて、絵に描いたような幸せな人生を送っていたのです。

(2) 第一の試練

しかしそんなヨブに、サタンが目留めて、神様にこう言います。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と仲の良い子どもたちが与えられているから、あなたを恐れているのです。もし多くの財産と仲の良い子どもたちが取り去られれば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様は、ヨブの財産と子どもたちを取り去ることをサタンに許可しました。するとヨブは一日のうちに、多くの財産と子どもたちが取り去られてしまうのです。シェバ人が襲いかかって来て、牛とろばが奪われ、落雷が落ちて来て、羊が焼き滅ぼされ、カルデア人が襲いかかって来て、らくだを奪われました。そしてしもべたちはすべて剣で殺されました。さらに、竜巻が襲って来て、十人の子どもたちがいた家が倒れ、みな死んでしまったのです。

(3) ヨブの信仰①

しかしヨブは、そのような試練の中でも神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言いました。「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」(1:21)。ヨブは、神様が私たちにあらゆるものを与えてくださる方であると同時に、私たちからあらゆるものを取られる方でもあると信

じていたのです。それゆえ彼は、神様が私たちにあらゆるものを与えてくださる時だけでなく、神様が私たちからあらゆるものを取られる時にも賛美したのです。それは、神様の御計画に対する信頼があったからです。私たちに与えてくださる時にも意味があり、取られる時にも意味があると信じていたからです。

(4)第二の試練

するとサタンは、もう一度神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもたちを奪われても、健康が与えられているから、あなたを恐れているのです。もし健康が取り去られれば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様は、ヨブの健康を取り去ることをサタンに許可したのです。するとヨブは、足の裏から頭のとっぺんまで、悪性の腫物で侵されたのです。それは、夜眠れないほどのもので、肉にうじ虫がわきます。皮膚も黒ずんで、骨にまで痛みが伴います。内臓も侵され、吐く息も臭くなり、やせ細っていきます。彼は、この病気のゆえに人々から嫌われ、灰の中に座ることになります。灰の中とは、町のゴミ捨て場、焼却場です。彼は、人々からゴミのように扱われるようになったのです。

また妻からは、「神を呪って死になさい」と言われます。ヨブは妻からも見捨てられ、妻は神様への信仰を捨てていきます。ヨブは、財産も子どもも失った上、さらに健康も失い、人々からも妻からも見捨てられていくのです。

(5)ヨブの信仰②

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざ受けるべきではないか」(2:10)。ヨブは、神様が私たちに幸せを与えてくださる方であると同時に、わざわざいをも与える方であると信じていたのです。神様は決して幸せだけを与える方ではない、祝福だけを与える方ではない、時にはわざわざいも与え、時には祝福を取られる方でもあると信じていたのです。ですから試練の時でも、決して神様への信仰を失いませんでした。決して神様を呪ったりしませんでした。

2. ヨブの三人の友人

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが非常に苦しい試練の中にあると聞いて、ヨブを慰めるために駆けつけて来たのです。彼らは、遠くからヨブの姿を見ると愕然とします。ヨブの姿が、ヨブだと分からないほど変り果てていたからです。

三人の友人たちは、ヨブにかける言葉も見つかりませんでした。彼らはただ、ヨブのために涙を流し、ヨブと共に一週間、灰の中に座り続けたのです。つまりヨブと共にゴミ捨て場で座り、一言も語らずにひたすら一週間、ヨブに寄り添い続けたのです。彼らには何もできなかったのです。彼らはただヨブと共に泣き、ヨブと共にいることしかできなかったのです。

しかし彼らが一週間共にいてくれたお陰で、ヨブはようやく自分の心の中にある正直な苦しみを語り始めます。ヨブは確かに、神様への信仰を失いませんでした。神様を呪ったりしませんでした。しかし心の中に苦しみがなかったわけではありません。彼は、人々からも妻からも見捨てられ、心の中の苦しみを分かち合う人がいなかったのです。

しかし三人の友人たちが、自分のために涙を流し、ただ黙って一週間共にいて寄り添い続けてくれたのです。そのような中でようやくヨブは、自分の心の中にある正直な苦しみを表現できるようになったのです。

ヨブ記を最後まで読むと分かりますが、この三人の友人たちは、最終的には神様の怒りを買うこととなります。この三人の友人たちは、4章から31章までヨブと議論することとなりますが、段々とヨブを責めるようになるからです。しかし最初は純粋に、ヨブを慰めようとしていたのです。そしてヨブも彼らの慰めに心が救われていたのだと思います。

3. ヨブの苦悩

ヨブは、三人の友情に應えるかのように口を開き、心の中にある苦しみを語り始めます。しかしその心の中にある苦しみは、想像を超えるほど大きなものでした。

ヨブは3章3節でこのように言います。「**私が生まれた日は滅び失せよ。『男の子が胎に宿った』と告げられたその夜も**」。ヨブは、自分が生まれた日、つまり誕生日を呪います。また自分が母親のお腹に宿った日を呪います。誕生日や妊娠の知らせは、本来は喜ばしいもので、祝われるべきものです。それは、その人の存在を喜ぶからです。誕生日を呪い、妊娠の知らせを呪うということは、その人の存在を呪い、否定することです。ヨブはここで、自分の存在を呪い、自分の存在を否定しているのです。

またヨブは11節で、「**なぜ私は、胎内で死ななかったのか。胎を出たとき、息絶えなかったのか**」と言います。ヨブは、自分が生まれてきたことを嘆きます。むしろ自分は母親のお腹の中で死んでいたらよかった、生まれてすぐに死んでいたらよかったとまで言うのです。

また21節では、「**彼らは死を待つが、死はやって来ない。隠された宝にまさって死を探し求めても**」と言います。ヨブは、死を願っているのです。ヨブにとっては、死への恐れよりも、生きることの苦しみのほうが大きくなっているのです。しかし死ぬことができない、生きなければならない、その苦しみを嘆いているのです。

ヨブは23節で、自分のことを「**自分の道が隠されている人、神が囲いに閉じ込めた人**」と表現しています。「自分の道が隠されている」とは、自分の存在や人生の意味を見失っていることであり、「神が囲いに閉じ込めた人」とは、死ぬこともできずに生きなければならない状態、人生に閉じ込められた状態ではないかと思えます。

ヨブは神様への信仰を失いませんでした。決して神様を呪うこともしませんでした。しかし自分自身を呪ったのです。自分の存在や人生の意味を見失って、生きることの苦しみがあまりにも大きくなり、死を願うようにさえなっていたのです。

ヨブの苦しみの原因は何でしょうか。財産を失ったことでしょうか。子どもを失ったことでしょうか。健康を失ったことでしょうか。人々や妻から見捨てられたことでしょうか。それも苦しみの原因の一部でしょう。しかしヨブの苦しみの原因の根本にあるものは、神様が沈黙しておられることではないでしょうか。

ヨブは財産と子どもたちを失った時、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」と神様を礼拝し、賛美しました。また健康を失い、人々からも妻からも見捨てられた時、「私たちは幸いを神から受けたのだから、わざわざいをも受けるべきではないか」と信仰を告白しました。しかし主なる神様は、ヨブに対して何も語りかけず、沈黙を貫いているのです。神様の沈黙は、ヨブ記 37 章まで続きます。38 章になって、ようやく神様は語り始めるのです。

ヨブは試練の中、神様の沈黙に耐えなければならなかったのです。試練の時こそ、神様の御言葉を必要としていました。試練の時こそ、神様との交わりを必要としていました。しかし試練の中で、どんなに神様を礼拝し、賛美しても、信仰を告白しても、神様は語りかけてくださらない。そのような中でヨブは、自分の存在や人生の意味を見失って、生きることよりも死を願うようになったのです。

ヨブにとっては、神様の御言葉こそが自分の存在価値や人生の意味や生きる意味を教えてくれるものだったのです。神様との交わりこそが生きる力を与えてくれるものだったのです。

25 節に、「**私がおびえていたもの、それが私を襲い、私が恐れていたもの、それが降りかかったからだ**」とありますが、ヨブがおびえ、恐れていたものは、財産や家族や健康を失うことではなく、神様御自身を失うことだったのです。神様の御言葉を、神様との交わりを失うことを何よりも恐れたのです。ヨブにとっては、神様御自身を失うことは、自分の存在や人生の意味、生きる力を失うことであつたのです。それぐらいヨブにとって神様は、人生の中心であつたのです。

おわりに

私たちはどうでしょうか。私たちにとって主なる神様は、どういう存在でしょうか。いてもいなくてもいい、自分の人生を祝福してくれれば、幸せを与えてくれれば信じてもいい、祝福を取られれば捨ててしまう、わざわざ与えられれば捨ててしまう、そういう存在でしょうか。私たちは、神様が神様であるという理由で、神様を信じているのでしょうか。

ヨブは試練の中で、神様の沈黙に耐えなければなりません。しかし神様は、私たちにいつも語りかけています。書かれた神の言葉である聖書を通して、神様はいつも私たちに語りかけています。

聖書の御言葉は、私たちに自分の存在価値や人生の意味、生きる意味を教えてください。また聖書の御言葉は私たちに生きる力を与えてくれます。私たちも人生の中で、ヨブのように、財産を失ったり、家族を失ったり、健康を失ったりすることもあるでしょう。主は与え、

主は取られる方であり、幸いもわざわいも与える方だからです。しかし神様は今、沈黙しておられません。聖書の御言葉を通して、試練の中で私たちに語りかけてくださいます。試練の中で聖書の御言葉を通して、私たちと共にいてくださいます。そして試練の中でも、自分の存在や人生の意味、生きる意味を見失うことがないように、私たちに生きる力を与えてくださるのです。どうか神様の語りかけに耳を傾けてください。神様は、聖書の御言葉を通して、今も私たちに語りかけておられます。

天におられる私たちの父である主なる神様。

あなたは、天地の創造主であり、私たちに命を与えてくださった方です。あなたは今も、聖書の御言葉を通して、私たちに語りかけてくださっています。あなたは私たちにあらゆるものを与えて祝福し、幸せを与えてくださる方です。そして時には私たちからあらゆるものを取り去り、わざわいをも与える方です。しかしすべてはあなたの御計画の中にあり、意味があることを信じさせてください。決してあなたへの信仰を失うことなく、あなたを呪うことがありませんように。

あなたの御言葉は、私たちに存在の価値と人生の意味、生きる意味、生きる力を与えてくれるものです。あなたから与えられる様々な試練の中でも、あなたの御言葉を聞くことを決して止めることがありませんように。どうか今日も私たちに語りかけてください。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。